龍安寺方丈庭園の作庭の意図についての考察

Contemplation on the Garden Design Motif of the Rock Garden of Ryoanji

杉尾 伸太郎

Shintaro Sugio

(株) プレック研究所

PREC Institute Inc.

Key Words : 1. 龍安寺方丈庭園 2. 五台山 3. 作庭意図

1. Ryoanji Rock Garden 2. Mt Wutai 3. Garden Design Motif

摘要

「龍安寺方丈庭園」は日本を代表する庭園である。しかし、庭の造られた時期も、作者も確定されていない。更に庭の作庭意図についても多くの説があるが定説は無い。ここでは作庭意図における結論として中国の五台山を写したものとしたい。

古くから五台山の文殊菩薩信仰は盛んであり、日本からも8世紀以来多くの聖が五台山を訪れ、仏像、絵画などを日本にもたらしてきた。それらを本歌として作られた13世紀の五台山文殊菩薩騎獅像の中央の岩の姿と「龍安寺方丈庭園」の中央の石組が同様でありモデルになったと思われる。

1. はじめに

「龍安寺方丈庭園」は多くの人々に知られる日本を代表する庭園である。龍安寺は細川勝元により、義天玄承を請じて1450年に創建されたが、1472年の応仁の乱で焼失した。その後1499年に細川政元の方で特芳禅傑が再建した。更に1797年の火災により、方丈も焼失し、西源院から移された建物が現在の方丈となっている。庭の造られた時期は創建時、再建時、江戸各時期と諸説があり、まだ確定されていない。

また、作者についても細川勝元を始めとし、特芳禅傑、相阿弥、般若房鉄船、子建西堂、金森宗和、小堀遠州など多くの人の名が挙げられている。

さらに庭の作庭意図についても「虎の子渡し配石」「心

字配石」「十六羅漢像配石」「七五三配石」「扇形配石」「黄金率などの抽象的配石」など多くの説があり、これも未だ定説が確立されていない。本発表においては、作庭の時期、作庭者は今後の検討によるものとし、今回は作庭意図のみについて研究の成果を発表したい。

図1 右の四群

2. 作庭意図についての考察

詳細な研究成果については別の発表の機会にしたいと考えているが、龍安寺方丈庭園の作庭の意図について多くの研究者は海中に在する小島を石組で表現しているとし、白砂は海と波を表現していると記している。ごく一部の人が漠然と雲海を貫いて在する山岳や島の頂上部を表現するものとして考えていたようである。

私は永年この考えをとるものであり、韓国の慶州や日本各地の地図、特に京都やその周辺の地形から、その考えを証明できる場所を探し続けていた。

結論として辿り着いた場所は、中国の五台山であると考えている。

3. モデルとしての五台山について

五台山は中国北京よりも、さらに内陸部である山西省の東北部から河北省の一部にまたがる広域な地域に存し、東台、北台、中台、西台、南台の五峰からなる隆起準平原の山々である。最高峰が北台で 3061m、南台の 2474m がもっとも低い。東台は 2795m、中台は 2895m、西台は 2773m である。古くから仙境として知られた地域であったが、この霊域に文殊菩薩が住むと考える信仰は 5 世紀の北魏からすでにあった。

華嚴経には清涼山に文殊菩薩が住んでいると書かれており、中国においては五台山を清涼山とみなして、次第

に文殊菩薩信仰が進んでいったものと思われる。

唐になると五台山文殊の信仰は益々盛んになり、8 世紀頃ピークを迎える。世界中から仏教の聖地へ憧れる聖が多く訪れ、日本からも 8 世紀に玄昉、9 世紀には円仁、10 世紀には奝然、11 世紀には成尋など他にも多くの人々が命がけの渡海の旅を重ねて訪れ、各宗、各派ともそれぞれに五台山文殊信仰に関係を持った。また、五台山の文殊菩薩は光に包まれ金色を発するとされ、その信仰的な奇跡の体験を得る事が目的ともなったのである。

それは南台などでの峰で起こる雲海におけるご来光や落日、ブロッケン現象などであったのかもしれない。五台山へ巡礼した日本の聖達も文殊菩薩の光を見る奇跡に恵まれたと記している。

これらの聖達は帰国にあたって多くの仏像、仏具、仏画、経典、楽器など、かなりの文物を日本に持ち帰ったものと思われる。

それらを手本にして、平泉中尊寺大長寿院の騎獅文殊菩薩半跏像が 12 世紀には作られ、日本へ文殊菩薩が渡ってくる様を表した醍醐寺の渡海文殊像が 13 世紀に描かれるようになった。

図2 五台山の位置図

図3 五台山の雲海

図4 醍醐寺 渡海文殊像 13世紀

4. モデルとしての図像

ここで注目すべきは諸文殊図像（重要文化財）のうち第十四図「五台山文殊」である。

これは醍醐寺の宝物の白描図像で、この中に五台山が描かれている。獅子に騎乗した文殊菩薩以外に、獅子の手綱を取る西域から来たと思われる壮年の優填王、利発で思慮深そうな文殊菩薩はまだ若い青年として描かれ、左後方にはさらに純心な童子が髪をみづらに結っている姿があり、この図の場合、左前方にある僧は仏陀波利でインドからの長旅の続きで加わっていて、疲れた顔の初

図5 五台山文殊菩薩騎獅像

図6 中央の石組に注目 横三尊形式

老で描かれるのが一般的であるが、この図では若い。右後方の自然木の杖を持つ老人は五台山の仙人の姿のようである。このように文殊に4人の眷属を描くイコノグラフィとして五尊図像が多くできるようになったのは奄然が帰国した1003年以後で、その弟子盛算が1016年釈迦堂を清涼山と号する勅を受けてからでなかろうか。そして多くの人の目にも触れる機会も増えていったものと思われる。

画では背後に五台山を配し、今にも五台山から雲海の上を進んでくる図である。獅子は踏割蓮華の上に足を乗せていて後方には、まだ雲海から姿を見せている五台山が見える。

中央が中台、その右に北台、右端が東台にあたり、中台の左は西台、その左が南台となっている。

その姿に注目すると中台の型は龍安寺方丈庭園の中央の石組にあたっており、三像形式を崩した型にずばり一

図7 中央の石組に注目 横三尊形式

図8 龍安寺方丈庭園

致している。その類似を否定する事はできない程であろう。

5. 五台山と風水

もともと五台山の地形は風水の考えによくあてはまっている。すなわち台懷鎮が明堂又は穴にあたり、中台が主山、北台が近祖山、黄尖山という山が唐以前は北台であったという説もあるが、いずれにせよ中祖山にあたり、ヒマラヤを太祖山にあてはめてもよいだろう。西台が白虎、南台が案山、東台が青龍にあてはまっている。

都林泉名勝図会の龍安寺方丈庭園の中には図中に5人の人物が書き込まれており、僧から説明を聞いている様を示しているようであるが、彼等が立っている所が、まさに明堂又は穴にあたり、そこから五台山の峰々を眺めている。いわば中心に入り込んで安らぎのある核心部の空間にずばり入り込んで庭を鑑賞しているのである。

風水的には最も優れた位置に展開して体験しているといえる。

図9 風水図

図10 都林泉名勝図会

6. おわりに

五台山は雲海に包まれることが多い。円仁の入唐求法巡礼行記からもわかるように、当時から現在と同じく山頂は森林限界で岩や草地や湿地、池であり、それに比べて山麓はうっそうとした森林に覆われていたものと思われる。したがって、いつそう雲海がよく発生し、神秘的な体験ができたのであろう。

結論として、龍安寺の方丈庭園は五台山の写しであると考えざるを得ないのである。

五つの石組は雲海から突き出した五台山の五峰をあらわしたもので、左から南台、西台、中台、北台、東台である。白砂は海ではなく雲海である。

本歌は中国から齎されたものであったかもしれないが醍醐寺の、この白描図像が龍安寺方丈庭園のモデルとなっているのは確信できる。

たしかに、龍安寺は臨済宗、妙心寺派になるが、鎌倉時代の文殊菩薩像で有名な天橋立にある智恩寺は同じ臨済宗、妙心寺派である。醍醐寺は真言宗であるが同じ図が龍安寺に当時伝わったり、龍安寺の作庭家が見る機会があったとしてもおかしくない。曹洞宗の總持寺、大乘寺にも文殊菩薩像が祀られているが、そもそも禅門では文殊に関する公案商量がなされるため食堂などに開祖もしくは文殊を祭ることが多いので、龍安寺にあったとしても矛盾しないのである。

このように龍安寺方丈庭園は五台山の写し、あるいは仏画の写しであることが相当程度明らかにできた。しかし、武居二郎の作庭記によると「生得の山水をおもわえて、その所々はさこそありしかと、思いよせ思いよせ立つべき也」あるいは「名所を思いめぐらして、面白き所々を、我がものになして、大姿をその所々になづらえて、やわらげ立つべき也」としている文から、庭を能くするこの庭の作者も、恐らくは当然、作庭記のことは知っていて、作庭記の呪縛からは完全には解き放たれることはなかったのである。しかし、そこには江山正美らのいう抽象芸術への第一歩は大胆に踏み出していたのであろう。

参考文献

- 日比野丈夫・小野勝年、1995「五台山」平凡社
円仁・足立喜六訳注、塩入良道補注、1970「入唐求法巡礼行記」平凡社
小野健吉、2004「岩波日本庭園辞典」岩波書店
森蘊、1957「日本の庭園」東京創元社
吉川需、1968「日本庭園のみかた ― 美と構成」第一法規出版
秦孟瀟、陳立権・邱茂訳、1991「中国仏教四大名山図鑑」柏書房
単霽翔、2008「五台山」中華人民共和国国家文物局
梶谷亮治、2002「醍醐寺大観 二」岩波書店
「日本有名庭園実測図集」同朋社
外山英策、1934「室町時代庭園史」思文閣
崔昌祚、三浦国雄ら訳、1997「韓国の風水思想」人文書院
秋里籬島、1799「都林泉名勝図会」
禅学大辞典編集所、1978「新版禅学大辞典」大修館書店
武居二郎、1995「作庭記」京都芸術短期大学

Abstract: The rock garden of the Ryoanji temple in Japan is a representative Japanese garden. However, its time built and paysagiste is unknown. It is hard to predict its specific concept, since there have been many theories of the design concept. This paper reports on the evidence to the conclusion of that the design depicted Mt. Wutai in China. Mt Wutai has been believed to be a dwelling of immortals since ancient times and also been associated with the worship of the bodhisattva Manjusri in Buddhism. Japanese Buddhist priests visited Mt Wutai around the 9th century. They brought back various goods such as the statues of Buddha and Buddhist sutras to Japan and they influenced works of art in Japan, including the image of Mt Wutai Manjusri. This drawing depicts Mt Wutai making its appearance, resembling that of the rock at the center of the garden of Ryoanji extremely well. So much, that it is obvious that the rock garden of the Ryanji temple is a depiction of Mt Wutai.